

書評

山口巖著『パロールの復権：ロシア・フォルマリズムから プラーグ言語美学へ』（ゆまに書房 1999年）

伊藤 順二

本書はきわめて分野横断的な関心の上に立脚している。評者は歴史学者であり、言語学・美学については門外漢といってもよい。しかし山口巖氏のこの著作は、言語研究の歴史を語りつつ、歴史そのものについても改めて問いを投げかけるものであり、示唆されることが多かった。それゆえ、あえて外野の視点から紹介と批評を試みたい。

著者は主としてロシア・東欧における言語学・美学（詩学）上の構造主義的思考の展開をたどりつつ、それを止揚する方法を模索している。同様のスタンスで書かれた好著として直ちに想起されるのは、マルクス主義的文芸批評家であるジェイムソンが1972年に書いた『言語の牢獄』であろう¹。ジェイムソンは文学の側から、ソシュールのモデルの「解放的影響」とその限界を描きつつ、ロシア・フォルマリズムに対する批判的考察を通じて70年代までの現代思想上の問題系全体を浮き彫りにしている。ジェイムソンと比較すれば山口巖氏の著作はあくまで言語学と美学上の問題を扱っており、限られた読者を対象とする専門書にすぎないようにもみえる。しかし例えば、社会ダーウィニズムの展開を思想的にたどる際、生物学そのものにおける進化論の展開が重要となる²ように、言語学や美学内部における構造主義の意義と問題点を、門外漢に対してもきわめて平易な例示と説明によって示した本書は、逆に単なる言語学史・美学史を超えた意義を有しているといえる。本書の目次は以下の通りである。

1. ジェイムソン、フレドリック『言語の牢獄 構造主義とロシア・フォルマリズム』（川口喬一訳）法政大学出版局 1988（原著1972）。

2. スティーヴン・ジェイ・グールドの一連の啓蒙的著作や、以下を参照：阪上孝編『変異するダーウィニズム 進化論と社会』京都大学学術出版会 2003。

第一部 序論

I. はじめに、II. フンボルト、III. ソシュール、IV. 『講義』のソシュール、V. ソシュールの『講義』の問題点、VI. ボドゥエン・デ・クルテネ、VII. プラーク学派、VIII. 共時と通時の問題点、IX. ラングとパロール、X. 連合と統合、XI. 比較方法—音韻のレヴェル、XII. トルベツコイ、XIII. パロールの言語学

第二部 プラーク構造主義美学—ヤン・ムカルジョフスキーとチェコ構造主義美学—

I. はじめに、II. チェコ構造主義の思想的系譜、III. ヤン・ムカルジョフスキー
付録：プラーク構造主義言語学の発生と展開

手荒に図式化すれば、第一部がソシュール再考を目指す言語学史、第二部がフォルマリズム再考を目指す美学史、といえるだろうか。「付録」はプラーク構造主義についての選文集で、トゥイニャーノフ、ヤコブソン、セシエ、マテジウス、トルンカ、ヴァヘク、ハヴラーネク、ダネシ、ジヴォフ、ティンバーレイクらの論文が訳出されている。これは日本の読者に著者が参照した原史料を提供するという意味でも、著者が編んだ論集としても重要な部分であり、分量的にも本書の三分の一を占める³。しかし以下の記述においてはこの部分は適宜参照するに留めたい。

序論は、ソシュールではなく「言語はエネルゲイアである」と規定したフンボルトを冒頭に掲げている点が興味深い。エネルゲイアとは生成、「動的なもの」であり、言語は精神が自己を実現する過程で主観と客観の対話として成立するという。フンボルトの言語観は「精神」を民族精神と読み替えるロマン主義的風潮と結合して、いわゆるサピア=ウォーフ仮説を経て、認知言語学（あるいは、認知人類学）に至る潮流を用意した。一方で、主観と客観の対話という規定は、ヘーゲルの弁証法をも横領し、「マルクス主義的言語哲学」の装いの下にバフチンの思想に結実するとも言える。

これに対して、近代言語学の祖と形容されることもあるソシュールの『講義』は、共時と通時、ラングとパロール、連合（形態論）と統合（統辞論）という二項対立によって言語の理論を整理しつつ、静態的・並立的ともいえる各々の第一項を重視し、構造主義への道を拓いた。その結果、構造の歴史的変容についての議論の停滞を招いた。この

3. 付録が原史料の翻訳であるということが一見して少々分かりにくい点は、本書の体裁上の問題点かもしれない。目次に各論文の著者と初出年を表記するほうが読者の便宜にかなうと思われる。

批判自体は初期フーコーに対する批判等で馴染みのものである。しかし本書の批判はその先へすすみ、連合・統合関係、あるいは「所記と能記が、結合するやたちどころに積極的なものに転化する」というというのは、殆ど信じがたい(42頁)」として、意味生成の動的プロセスについて再考を促している。著者が別の書物で展開している言語類型学は、言語学上におけるその実現の試みの一つなのであろう⁴。

しかし、ソシュール自身も、通時現象を体系的に見る必要性については言及していた。弟子のセシエは「組織されたパロール」という概念を案出し、静態言語学と発達言語学との交点、すなわち共時と通時の交点としての「組織されたパロール」こそが、偶然的・外的要因を蓄積する変化の源として研究すべき主対象である、とした。セシエの「語彙は戦場であり、その内的構成は絶え間なく革命の道程にある(322頁)」という表現は、後述するプラーグ学派の体系認識に通底する。ボドゥエン・デ・クルテネもパロールの社会性・機能性を重視するとともに、ラングを動的体系として捉え、その実践として地域言語学(バルカン言語学)の端緒を拓いた。

著者は、ラングは個人的発話の総和であり、すなわちそれは社会的発話の総和であること、換言すれば、あらゆる文は個人的であると同時に社会的でもあることから、研究対象としては「ラングとパロールも一つの連続体をなしているのかも知れない(58頁)」としている。これは集合論的整理からなされた指摘として重要ではあるが、法とその実践、体制とその改革、習俗とその変化、という歴史的イメージに引きつけていえば、書物としての規範文法、あるいは学習や矯正の現場における規範性という点で、むしろラング的なものをパロール側からもう一度規定し直すことが必要になってくると思われる。その作業は第二部で行われているが、「パロールの言語学」からみて「ラング」とは何であるかについて、再考の余地はあるといえるかもしれない。

さて、著者はソシュールの構造主義を再考する契機としてプラーグ学派に目を向ける。プラーグ学派を「音韻論的構造主義」と限定的に捉える、あるいは構造主義との連続性のみを強調する一部の評価は誤りであり、ロシア系のメンバーのみが日本では広く紹介された結果、プラーグ学派の機能的観点が比較的閑却されてきたという。しかし実際には、言語を「ある目的に適合させられた、表現手段の体系」と捉えるマテジウスが共時と通時とをつなぐ理論を様々に模索していた。すでに1911年の「言語現象の潜在性につ

4. 山口巖『類型学序説 ロシア・ソヴェト言語研究の貢献』京都大学学術出版会 1995。

いて」で、共時的体系の下で許容される「ゆれ」が注目されている。言語現象における中心と周縁の存在、一定の幅の中での振動が、通時的に中心自体の移動を導くという議論である。ただしこの移動には、偶然性のみならず、体系全体における布置が関連してくる。著者は音韻変化の複雑さを、日本語のいわゆるハ行の発音が pa から ha へと変化する過程を例に挙げて分かりやすく示している。

こうした考えは、1928年のプラーグ学派のテーゼの第4項「全ての共時体系は体系の分かちがたい構造的要素として、自己の過去と未来を持っているのである(286頁)」という観点に直結する。すなわち、ダネシやヴァヘクが論ずるように、通時的現象は共時的体系に内包されており、あらゆる要素に時間が作用している、と考えられる⁵。また、差異の創出＝認識という点で、これは認知言語学への道をも拓いている。著者は輪郭の認識についてのいわゆる「マッハ帯」、さらにまたバーリンとケイの色彩語の研究成果を例に、中心と周縁の対立・移動というテーマが認知言語学にも通じるものであることを示唆している。その他にも言語学上の様々なレベルでの「変容」についての議論が紹介されているが、ここでは省略せざるをえない。

しかし、ボドゥエンとソシュールの構想は、トルベツコイの1939年の『音韻論』において学問的に実現される。トルベツコイの理論の言語学上の意義は極めて大きいが、その体系性はラングとパロール、能記と所記の峻別の上に成立した。そのため「トルベツコイは専ら体系それ自身の研究に向かうことになる。この故に彼が「機能」について語るとき実際にはそれがラングの内部における機能に限定されることになるのは、一つの必然であった(132頁)」。

対して著者は「パロールの言語学」を構想する。「パロールの言語学」の問題意識の中心にあるのは、言語活動において人間が自らの目的にかなう表現手段をいかにして選択するか、ということである。そもそも選択するという行為が可能になるための前提条件として二つの仮説を著者は提起している。

5. こうした論法は、硬直的な発展段階論の脱構築を試みるマルクス主義的批評家のものとも通底する。ジェイムソン、フレドリック『政治的無意識』(大橋洋一他訳)平凡社 1989(原著1981);スピヴァク、ガヤトリ・チャクラヴォルティ『ポストコロニアル理性批判:消え去りゆく現在の歴史のために』(上村忠男、本橋哲也訳)月曜社 2003(原著1999)。

仮説1 文体論的価値という概念は、同一の観念に対して表現手段が幾通りも存在する、ということを前提している。

仮説2 人は、同一の「観念」に対して複数の表現の選択の可能性がある時、その各々に異なった表現価値を与えようとする本能を持っている(144・145頁)。

こうした発想から言語学をみるとき、規範的表現はしばしば客観的・中立的と見なされ、一方で周縁的表現の表現価値は高まる。すなわち、言語の変化ということを考える場合、変化の場としての文体の研究が重要性をもつことになる。こうして本書は言語学上の通時的变化の考察から構造主義美学の学説史へと論点を移していく。文体論が単に言語学と美学(詩学・文学)のみならず、通時と共時をつなぐ結節点にもなるという認識は、きわめて重要であるといえよう。

第二部ではまずロシア・フォルマリズムが簡潔に紹介される。いわゆるフォルマリズム第一期のエイヘンバウム、ヤクビンスキー、シクロフスキーは詩的言語が実用言語とは別の自律的価値をもつとした。実用言語の自動化に対して詩的言語が「非日常化」(異化)作用をもつこと、トルストイの「ホルストメール」に見られるように「非日常化」は「日常」を見直し「生活の感覚を取り戻す」契機となること、それこそが芸術作品の目的である、ということが主張された。しかし通時的には、「非日常化」の技法のほとんどは文学上の規範と化し、自動化(陳腐化)してしまう。これはパラドックスであり、また、新規な技法の絶えまない創出が自己目的化してしまう。

このために、第一期の理論には限界があり、機能的体系としての作品を重視するトゥイニャーノフを代表とする第二期に道を譲ることになった、というのが従来の説である。しかし著者は、論理的矛盾を解決しきれなかったにせよ、パロールに注目した第一期の論者たちに対し、トゥイニャーノフはそもそも対象をみる視点が異なる、と指摘する。

トゥイニャーノフは文学作品を共時的・機能的「構成物」として見ており、文学の進化は構成原理の弁証法的発展として記述される。しかし彼の「構成原理」の規定は曖昧である。これはそもそも文学「作品」がパロールであると同時に一つの作品としてラングでもあると規定したために生じた矛盾である。しかも、既存の規範化した構成原理がラングに属するとしても、彷徨変異としての周縁的現象がどこに属するのか、それがいかに生成されラング的なものとなるか、すなわち新しい規範がどのようにして生まれるかが説明されていない。彼の「機能」についての理解も、プラーグ学派に較べて、狭い。

ポドゥエンの弟子であるヤクビンスキーは、すでにブラーグ学派の機能的観点に到達しており、1931年には言語への主体の関与を否定するソシュールをも批判している。この点でヤクビンスキーは、本書の著者の評価によれば、戦前すでにポスト構造主義的認識に到達していた。しかしフォルマリズムの全体的な流れのなかではそれは理解されなかった、という。

ソシュールへの批判としてヤクビンスキー以上に重要なのがバフチンの理論である。バフチンはモノローグ的な詩とは異なり、小説の言葉はディアローグあるいはポリローグ、すなわち対話的なものであるとした。言語にはイデオロギーが充満しており、それぞれの言表は中心＝規範に対する求心力と遠心力の交点にある。1929年の『マルクシズムと言語哲学』は、言語に関する思想を、ライブニッツ、ソシュール、フォルマリストの「抽象的客観主義」、フンボルト、クローチュエ、マルの「個人的主観主義」という二つの潮流に分けている。バフチンは「対話性」の観点から言語の社会性を捉えることで、規範性と個人性という二項対立そのものを止揚し、言語は「介入不可能な共時的体系」ではなく、逆に、間断なく生じる規範の対話と抗争の場であるとした。この発想はその後の構造主義批判の一つのモデルともなったといえる。しかし「パロールの言語学」という観点からすれば、バフチンの理論は暗黙裏に一定の規範を前提としており、規範とパロールとの関係は曖昧なままである。

美学的観点から具体的にパロールをより鮮やかに規定したのは、ブラーグ学派の理論的柱となったムカルジョフスキーである。彼はロシア・フォルマリズムとは別に、独立して自らの研究を始めていた。初期の著作『マーハの〈マーイ〉。美学的研究』（1928）では、材料（テーマと言語）に対して形式を「材料本来の形式の歪曲」と捉え、内容と形式という概念をロシア・フォルマリズムとは異なる形で定式化している。文学作品においては、同じ傾向の言語的要素を用意し、それらを互いに呼応するように配置することでパロールの組織化が行われる。

ムカルジョフスキーの講義ノート「詩言語の哲学」（1933/34）などでは、その差異はいつそう明瞭となる。「詩言語」の性格は「知的性格の言語」と「情緒的言語」を二極として存在するが、これは実用言語／詩的言語というフォルマリズムの規定とは、ややズレており、表現性をもつか、それとも美的経験を喚起するか、という機能の差によって定義されている。「詩言語」は能記と所記の関係そのものを活性化するとともに、構造

化する。ザウミにみられるように、自律的記号が存在する一方で、言語そのものは写像的記号以上にコンテキストへの依存度が高い。そのために文学作品は閉じた体系をつくる傾向がある。言いかえれば、パロールをラング化したものが作品である、といえる。

1940年の「言語美学」においてムカルジョフスキーの構想は完成する。彼は美学研究上の作業仮説として「美素」を提唱し、「美素」の三つの様相として、機能・規範・価値を挙げる。規範と逸脱との平衡の上に価値の「美素」が成立する。「詩言語」は伝達と自律的価値の表出という両面性をもち、作品はその緊張関係の上に成立する。記号としてのパロールと重層的なパロールに基づいて文学作品は「詩言語」の複数性（いわゆるバフチンの多声性）を実現する、という。著者は、ムカルジョフスキーの構想が理論的可能性にとどまっているとはいえ、しばしば構造自体が否定あるいは廃棄されるという現状に対して、ムカルジョフスキーを内心的 endocentric な「ポスト構造主義」として高く評価している。

ムカルジョフスキーの思想は、戦前のロシア・東欧思想の一つの到達点として極めて興味深い。歴史学者としては、本書で鮮やかに描きだされたロシア・東欧におけるラング再考のプロセスは、1920年代にフランスのアナール学派が唱えた「集合的心性」に対して、1960年代以降噴出した「心性」批判の学説史とほぼ重なり、その点でも極めて意義深い視点を得ることができた⁶。一方、美学史的には、「規範」と「逸脱」というテーマは、ヒューム以来の西欧美学全体の流れに関わっている⁷。その点で、本書は単に言語理論の考察というにとどまらず、現代思想の出発点に位置するソシュールへの批判的再考を促す労作として、より広い読者に薦められるべき重要性をもっている。

6. アナール学派についてはパーク、ピーター『フランス歴史学革命：アナール学派 1929-89年』（大津真作訳）岩波書店、1992（原著 1990）を参照。現代歴史学の問題については、とりあえずギンズブルグ、カルロ『歴史・レトリック・実証』（上村忠男訳）みすず書房 2001（原著 1999）を参照。

7. デリダ、ジャック『エコノミメーシス』（湯浅博雄、小森謙一郎訳）未来社 2006（原著 1975）。